

富山大学人文学部 平成 29 年度卒業論文

「ゆるさ」が導くまちづくり
—鯖江市役所 JK 課が既成観念を打ち破る—

11410108 徳田有咲

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース社会学分野
学籍番号 11410108
氏名 徳田有咲

—目次—

第1章 問題関心・・・1

第2章 先行研究・・・2～5

第1節 協働という概念の誕生・・・2

第2節 行政と市民の関係・・・3

第3節 高校生主体のまちづくりに関する報告・・・4

第4節 本省のまとめと調査分析の着眼点・・・5

第3章 調査報告・・・6～34

第1節 女子高生によるまちづくり・・・6

第2節 活動内容・・・7

第3節 調査概要・・・8～9

第4節 鯖江市のまちづくりの取り組み・・・10

第5節 JK 課設立時・・・11

第6節 JK 課の基本情報 12～20

第1項 メンバー構成とイベント実施数・・・12～13

第2項 募集方法・・・13～14

第3項 活動・役割分担・・・14

第4項 イベント概要・・・15～20

第5項 JK 課メンバー卒業後・・・20

第7節 JK 課2期生のミサ・・・21～25

第1項 周りの存在・・・21～22

第2項 イベントを通して・・・22

第3項 鯖江に対するイメージの変化・・・22～23

第4項 居場所の創出・・・23～24

第5項 卒業後の進路・・・24～25

第8節 JK 課 OG の中本邦子さん 26～29

第1項 成長と人との繋がり場・・・26～28

第2項 SAN と JK 課の違い・・・28～29

第9節 SAN・・・30～34

第1項 SAN とは・・・30

第2項 イベントの概要・・・30～33

第3項 SAN 代表の釜井剣さん・・・33

第4項 居場所と出番・・・33～34

第4章 分析・・・35～39

第1節 JK課の3つの特徴・・・35

第2節 「ゆるい」市民によるまちづくり・・・36

第3節 教えるのではなくともに創る・・・37～38

第4節 大人側に変化を起こす・・・39

第5節 鯖江の成長・・・40～41

第5章 考察・・・42～45

参考文献・参考資料・・・46

第1章 問題関心

鯖江市では、平成15年に「鯖江市市民活動によるまちづくり推進条例」、平成22年には「鯖江市民主役条例」を市民提案から創り上げ、全国的に早い時期から「市民主役」「市民協働」のまちづくりを進めてきた。近年では、市民との情報共有を進めるツールとして、ICTを活用した「オープンデータ」「データシティ鯖江」事業においても、新たに全国に先駆けて実施している。また、大学生からまちづくりに対する提案を受け入れ、具現化するといった、学生の自由な発想と行動力を活かしたまちづくりを行う「学生連携事業」も実施している。こうした事業は、いずれも市民と市が、様々な情報とまちづくりへの思いを共有化しながら、「自分たちのまちは自分たちでつくる」という基本理念により実施されている。

今回は、そのような市民主役のまちづくりの一環として、平成26年4月14日にスタートした「鯖江市役所JK課プロジェクト」という事業に着目していく。初めは「JK課」という名前に批判的な意見も多かったが、活動が評価されていく中でほとんど無くなり、平成29年にJK課は4年目を迎えている。鯖江市役所JK課が継続してきた理由と今後の課題について明らかにしていきたい。

第2章 先行研究

第1節 協働という概念の誕生

松野（1999）では、高度経済成長期から、石油ショックによって低経済成長期へ入り、行政不信など政治・行政環境が変化したという。これに呼応して、住民（市民）と行政間関係を行政主導型から、住民（市民）と行政の協働型（住民〔市民〕協働型）へ転換させる方向性が模索されるようになり、市民活動も、行政活動に対する〈抗議運動〉から行政活動への〈参加〉、さらに、市民と行政の新しい関係としての〈協働〉へと展開しつつあるようだ。抗議運動として「市民オンブズマン」「住民投票」、行政活動への参加として「市民立法」が挙げられているが、抗議運動はあくまで異議申し立てであり、行政側が聞く耳を持たなければ意味がないし、市民立法も行政に対する新しい政策的な市民参加の方法ではあるが、行政側がそれを協議・審議する機会を設けなければ意味がない。このように、住民の政策的意思を十分に反映してこなかったために、新たに協働的な関係を構築しようとする動きが出てきたのだという。

第2節 行政と市民の関係

行政と市民の関係について、松野（1999）は「依頼」「補助」（補助されているという関係で行政との対等性が失われる）「委託」（行政と市民団体の双方が契約主体として自主性が確保される）の3つの関係があり、その中でも「委託」が〈協働〉の関係を目指す最適な手段だとしている。さらに、〈協働〉を「行政主導型」「住民主導型」「双方向型」の3つに分類しており、「行政主導型」は行政側の住民支配意識が強く、「住民主導型」はそんな行政側の住民との協働意識が弱いために利害調整や意見調整が課題である。「双方向型」が一番理想的ではあるが、行政はあくまでも補助的で、市民活動を支援していく姿勢・行動・財政援助が必要であるという意識を行政側が持てるかが課題となる。

「行政主導型」の住民参加型まちづくりと考えられる事例として、田中・辻村・黒岡（2001）では、山形県金山町の「景観まちづくり」と岩手県藤沢町の「農業と福祉のまちづくり」が取り上げられている。金山町のまちづくりは、景観を大切にしたいという町長により「全町美化運動」から始まった。行政側が主体となって活動していくうちに住民のボランティアグループや地域住民の参加が増え、最終的には行政がそれを支援していく形となったものである。藤沢町のまちづくりにおいても、人口減少による過疎化への危機意識から、始めは行政側が「住民本位のまちづくり」を提唱し、住民自治組織の結成を進めた。そしてその後、自治組織による農業中心のまちづくりが進められていった。どちらも行政が主導する形で始まっているが、「住民本位のまちづくり」を目指した結果、協働型のまちづくりへと転化したという事例である。そのため、まちづくりの後半は「双方向型」に位置づけられるのではないだろうか。

2つ目の「住民主導型」のまちづくりと考えられる事例としては、田村（1999）の世田谷区にある羽木公園に、住民の提案からプレイパークを作ったという事例がある。子どもたちが伸び伸びと自由に遊べるものにしようという住民の提案に対して、行政側は安全性の問題、責任の所在の問題、都市公園法の問題などから反対したのだが、市民側からの粘り強い働きかけにより実現した。行政側は土地の確保と運営費を提供し、世田谷区ボランティア協会に委託された後は、協会のプレイリーダーが常駐したり、保険にも加入しているという。今ではこの場所だけは行政の枠を離れて完全に市民主体となっているようだ。

第3節 高校生主体のまちづくりに関する報告

ここでは、まちづくりに高校生が参加している事例を3つ取り上げる。まず1つ目、宮下（2004）では、辰野高校の生徒・その父母・教職員・地域住民による「辰高フォーラム」が紹介されている。主催は学校・PTA・同窓会の共催とされ、生徒たちがそれに参加する形を取っている。みんなとの話し合いの中で出た課題に対して、生徒会が中心となって取り組むというもので、ゴミ拾いや商店街の活性化を図ったフリーマーケットなどを開催した。

2つ目に、陣内（2016）では、栃木市による「若者の居場所づくり事業」が取り上げられている。その事業の一つである、「若者の居場所作り検討会」において、大人からアドバイスを受けながら、そこで出された案を、市に提出するというものである。この活動により、実際に高校生のまちへの関心が高まったという事例である。

最後、3つ目は、青森市で行われた、「NPO 法人あおもり若者プロジェクト クリエイト」（以下クリエイト）による「高校生カフェ」ABCである。地元高校生によって2013年6月から2014年3月までの期間限定で展開されたカフェであり、この活動によって、高品質で安全な県産食材に対して関心を持つことや社会への関心を高めること、青森への愛着を高めること、自分の存在意義や居場所を見出し、自己肯定感を育むことなどを目的としている。（高校生カフェABC ホームページ）この活動の主体となったまちづくり団体「クリエイト」は2009年に当時高校2年生だった久保田さんが立ち上げたものであり、現在は高校生・大学生を中心に活動している。地域の若者が主体となったまちづくり事業を通じて、地域社会における課題解決とともに若者の能力向上に寄与することを目的としている。（あおもり若者プロジェクト クリエイト ホームページ）

第4節 本章のまとめと調査分析の着眼点

本稿では鯖江市の事例を取り上げ、松野（1999）や田中・辻村・黒岡（1999）で挙げられている協働のまちづくりと比較しながら、組織化されていない鯖江市役所JK課のまちづくりがなぜ成功しているのだろうか、その理由やプロセスを鯖江市以外の高校生によるまちづくりとの比較から明らかにしていきたい。さらに、「まちづくり運動においては、目的達成の結果志向や手段重視ではなく、運動過程で高まる人々の学習効果や連帯意識の醸成こそ重要である」（田中 1999:42）という記述をふまえ、まちづくりのビジョンが全くないJK課のメンバーがプロジェクトに関わることで、まちづくりに対する考え方や鯖江に対する思いがどう変化したのかについてもインタビューをもとに分析していく。

また、第1節と第2節では、松野の論文から、市民と行政の関係は戦後の行政主導型から近年の協働型へと変化しており、協働型のまちづくりを進めるためには、行政側が住民の政策的意思を十分発揮しようという意識や、行政側の活動はあくまで補助的であるべきであり、市民活動を支援していく姿勢・行動・財政管理が必要であるということをもとめてきた。そしてさらに、市民と行政の関係を松野は「行政主導型」「住民主導型」「双方向型」の3つに分類し、それに関して、田中（2001）や田村（1999）から具体的なまちづくりの事例を取り上げて記述した。以上のことから、行政が持つべき意識や市民と行政の関係における、3つの分類に関して、JK課の活動は住民主体であるか、3つの中ではどこに分類できるのか、また、第3節で挙げた高校生主体のまちづくりとの比較により、JK課の特徴についても分析したい。

第3章 調査報告

第1節 女子高生によるまちづくり

鯖江市JK課プロジェクトは、平成26年1月19日にNPO法人エル・コミュニティによって初めて開催された「おとな版地域活性化プランコンテスト」で誕生し、平成26年4月14日にスタートしたまちづくり事業である。女子高生による実験的な市民協働推進プロジェクトであり、正規の行政組織ではなく、仮想的なプロジェクトとして活動している。

メンバーは鯖江市に在住、もしくは鯖江市内の高校に通う現役の女子高生（福井工業高等専門学校の1～3年生を含む）で構成されている。構成員が女子高生である理由は、鯖江市ではこのような市民参加による住民自治や新しいまちづくりを進める中で、公共サービスに対する無関心層、特に若者との連携が課題とされていることが関係している。また、男女共同参画社会の形成にも力を入れているため、女子高生自らが企画した地域活動を実践することを通して、若者、特に女性の積極的な行政参加を図る、新たなモデル都市となることを期待している。

第2節 活動内容

鯖江市役所 JK 課プロジェクトのプロデューサーは、福井県若狭町出身であり、「NEET 株式会社」や「就活アウトロー採用」、「ナルシスト採用」、週休 4 日で月収 15 万円の「ゆるい就職」など、新しい働き方や組織づくりを模索・提案する実験的プロジェクトを多数企画・実施している、若新雄純である。若新雄純が重視する“ゆるさ”が JK 課にも表れており、活動は何曜日、週に何日と決まっていることはなく、放課後や土日にゆるく集まって、お菓子を食べて雑談をしながら、アイデアをだしていくスタイルだ。そのアイデアから生まれた活動内容は多岐にわたり、「ピカピカプラン」や「スイーツプロジェクト」、「JK 課インターンシップ」、「図書館アプリ Sabota の開発」などである。平成 27 年にはその活動が評価され、平成 27 年度ふるさとづくり大賞自治体部門「総務大臣賞」を受賞した。高校生と地域を結びつけることや、若者の意識改革、生活環境の充実に加え、市内のおばちゃんたちが自主的に活動を開始した OC（おばちゃん）課の発足も話題性を持つといった点が評価された。

第3節 調査概要

平成28年8月26日から28日の三日間、鯖江市で全国高校生まちづくりサミットが開催された。そのうち、活動発表が行われる27日のみ参加し、フィールドワークを行った。また、平成28年11月14日、12月21日、平成29年6月20日にインタビュー調査を行った。以下はその概要である。

・フィールドワーク

日時：平成28年8月27日（土）

場所：サバエ・シティーホテル

参加数：7団体

・インタビュー

① JK課担当の高橋さん

日時：平成28年11月14日

場所：鯖江市役所

参加者：高橋藤憲さん（市民協働課）、橋本和久さん（市民協働課課長）

② JK課のメンバー

日時：平成28年12月21日

場所：鯖江市役所

参加者：高橋藤憲さん、女子高生12人

③ 若新雄純さん

日時：平成28年12月26日

場所：鯖江市役所

参加者：若新雄純さん、高橋藤憲さん、鈴木さん（仁愛大学4年生）

④ ミサ（鯖江高校3年）

日時：平成29年6月20日、9月28日

場所：鯖江市役所、鯖江駅

参加者：ミサ（JK課2期生）

⑤ 釜井剣さん（福井高専専攻科1年）

日時：平成29年9月28日

場所：福井工業高等専門学校

参加者：釜井剣さん（SAN代表）

⑥中本邦子（福井高専専攻科 1 年）

日時：平成 29 年 11 月 30 日

場所：福井工業高等専門学校

参加者：中本邦子さん（SAN 副代表）

このほか、JK 課ミーティングへの参加や、高橋さんから提供していただいた文書資料「鯖江市役所 JK 課プロジェクト概要」（2017/10/31 日現在）を参考に、調査報告を記述する。

第4節 鯖江市のまちづくりへの取り組みについて

第1章で述べたように、鯖江市では、平成15年に「鯖江市市民活動によるまちづくり推進条例」、平成22年には「鯖江市民主役条例」を市民提案から創り上げるなど全国的に早い段階から市民主役のまちづくりを進めている。具体的には、情報共有を進めるツールとして、ICTを活用した「オープンデータ」「データシティ鯖江」事業を実施したり、JK課が提案された「地域活性化プランコンテスト」のように、大学生からの提案を市のサポートの下実現するといった取り組みも行われている。また、NPO法人エル・コミュニティや学生団体with、JK課、SAN、OC課などの市民団体が数多く存在している。そんな、市民主役のまちづくりが盛んな鯖江市であるが、JK課のメンバーは加入前、どれくらい鯖江市のことを知っていたのだろうか。JK課やSANへの加入前と加入後に分けて、ミサと中本さん、釜井さんの語りをまとめた。

ミサ：なにも知らなかったです。知らなくて、すごいなんか、でも市長が、すごい気さくな方っていうのも知らずに、なんか、なにしてるんやろーみたいな。(…省略…) 学校で、いろんな税務署の人が来て、なんか話ししてくれる機会とかあるんですけど、その時に、なんか鯖江市いろんな取り組みしてらっしゃって、鯖江市長も活性化みたいなこと言ってますねみたいな。

中本さん：全く知らないし興味もないって感じ。

釜井さん：JK課以外のまちづくりは全く知りませんでした。

3人とも鯖江市の取り組みについて、加入前はほとんど知らなかったことがわかる。ミサのように学校で講演会が開かれ、まちづくりの話聞く機会もあるようだが、どんなことをしているかまではあまり把握していないし、興味もないような感じであった。釜井さんもJK課については知っているが、それ以外についてはあまり知らない様であった。しかし、加入後は3人とも市役所の人やまちづくり関係の方と関わることも多いため、まちづくりに関して詳しくなると語っていた。中本さんに限って言えば、加入を機に、まちづくりに関する広告などが自然と目に入るようになったそう。

以上のことから、JK課やSANの存在は、それぞれのメンバーにとって、まちづくりへの関心を高めるものとなっているといえる。さらに、釜井さんはJK課の存在を、メンバーのSNSの更新や、女子高生がまちづくりをするという話題性で取り上げられた全国ニュースや新聞などで知り、SANに加入したという。このことから、JK課やSANのような高校生のまちづくり団体が活躍することは、若者がまちづくりをより身近に感じることができるとともに、まちづくりへの参画促進にもつながっていると考えられる。

第5節 JK 課設立時

「鯖江市役所 JK 課プロジェクト概要」(2017/10/31 現在)によれば、JK 課が設立した当初、鯖江市役所には、鯖江市以外の市や県外から 1 週間で 100 件を超えるクレームがあった。それは「JK という言葉は隠語ではないか。それを市役所が使うのか」「JK ビジネスだ」「女子だけ限定して、男子は無視か」「高校生なんかに何ができるのか」「タダ働かさせるのか」「あの子は可愛いけど、この子は可愛くない」などである。

その中でも全体の半分以上を占めたクレームである「JK という言葉は隠語ではないか。それを市役所が使うのか」ということについて考えたい。平成 29 年 10 月 3 日の福井新聞の記事には、「JK」という言葉が悪いイメージを持つきっかけとなった「JK ビジネス」のことについて書かれている。JK ビジネスとは、「JK」と呼ばれる女子高生らが、添い寝やデートなどの親密なサービスを売りに、男性を接客する業態のことを指す。このサービスを提供する中で、児童売春や性犯罪などが起こることもあり、そういった店舗が東京や大阪に集中しているという。そのため、「JK という言葉は隠語であり、その言葉を、ましてや市役所が使うとはどういうことだ」といった批判のほとんどが東京や大阪、名古屋といった、JK ビジネスの店舗がある都会からであった。

しかし、実際、女子高生という言葉「JK」という略称で呼び始めたのは女子高生自身であり、愛着を持った呼び方として認識しているため、JK 課に所属する女の子が「私たちの言葉をそんな風に使わないでほしい」と感じたように、10 代 20 代の若者にとって、「JK ビジネスという言葉があるから市役所が使うのはおかしい」という大人の考えの方が信じられないだろう。

これまで、市外県外からの批判について記述してきたが、鯖江市内からの批判がなかったわけではない。今でこそ様々な高校から JK 課のメンバーが集まってきているが、初めは高専から 12 人、丹生高校から 1 人と、ほとんど高専生で構成されており、見た目が多少派手であったことから、他の学校からは「派手な連中たちうちの学校を一緒にしてほしくない」といったクレームがあった。しかし、平成 29 年で 4 年目を迎える JK 課のこれまでの活躍により、今では学校から「鯖江市に貢献している団体なので積極的に入ってほしい」と言われるほど、JK 課の活動が評価されてきている。このことから、大人が若者に持っていた考え方が「チャラチャラしている」といったものから、「大人が考え付かないことをやってくれている」「鯖江に貢献している」といったものへと変化していることが分かる。

第6節 JK課の基本情報

第1項 メンバー構成とイベント実施数

JK課について現時点で分かっていることを、「鯖江市役所 JK課プロジェクト概要」(2017/10/31 現在)に基づいて述べる。

1期目 (平成26年度)

スタートアップ記者会見：平成26年4月14日

メンバー：13人(高専12人、丹生1人)

(学年別：3年生11人、1年生2人)

活動日数：79日

イベント実施数：22(マラソン給水ボランティア、図書館空席状況確認アプリ「Sabota」の開発、オリジナルスイーツ販売、福島っ子への化学実験、めがね供養、ピカピカプラン1, 2, 3など)

2期目 (平成27年度)

スタートアップ記者会見：平成27年5月2日

メンバー：16人(高専8人、武生商業3人、丹生2人、鯖江1人、足羽1人、武生(定時制)1人)

(学年別：2年生2人、1年生14人)

活動日数：80日

イベント実施数：21(2期生募集ティッシュ配り、マラソン給水ボランティア、オリジナルスイーツ販売、自衛隊コラボ、JK課インターンシップ、めがね供養、ピカピカプラン4, 5, 6、JC3体験会、JK課とガチで語ろうなど)

3期目 (平成28年度)

スタートアップ記者会見：平成28年5月23日

メンバー：27人(高専15人、武生商業2人、丹生4人、鯖江2人、丹南3人、武生/定時制1人)

(学年別：3年生2人、2年生10人、1年生15人)

活動日数：115日

イベント実施数：19(3期生募集ティッシュ配り、マラソン給水ボランティア、オリジナルスイーツ販売、ピカピカプラン7, 8、模擬投票「アナウンサーめがね総選挙」、全国高校生まちづくりサミット、劇団近松出演など)

4期目 (平成29年度)

スタートアップ記者会見：平成29年5月20日

メンバー：45人（高専27人、武生商業3人、丹生4人、鯖江2人、丹南6人、武生/定時制1人、武生東2人）

（学年別：3年生6人、2年生15人、1年生24人）

活動日数：51日

イベント実施数：10（4期生募集ティッシュ配り、マラソン給水ボランティア、オリジナルスイーツ販売、めがね供養、ピカピカプラン9、愛は地球を救う募金活動、IOFT出展、ローソン新商品コラボなど）

第2項 募集方法

JK課プロジェクトは平成26年1月19日に若新さんから提案が上がり、市として活動できたのは4月からであった。そのため、JK課が4月から活動するにあたって、若新さんの提案をサポートする市民や大人版地域活性化プランコンテスト実行委員会の構成員がメンバーを集めようという話になる。そこで、実行委員会構成員の一人である男子大学生の恋人が女子高生だったということもあり、TwitterでJK課についてつぶやいてもらおうという話になった。また、同時期に、若新さんと一緒にJK課の提案を行った鯖江市役所に勤める横井さんが、学生団体withに所属するメンバーに女子高生を紹介してもらおうと動いており、そのメンバーの一人が、同じ高専生であり後輩である中本邦子さんとその友達である通称きえさんを横井さんに紹介する。そして、結果的にJK課に入るようになった2人も学校の友達に直接募集を呼びかけることになったという。つまり、ある女子高生によるTwitterを見た人たちの口コミやJK課の最初のメンバーである中本さんときえさんの2人による学校への声掛けによって、18人ほど集まったということだ。4月以降になると市もHPやTwitterなどで募集をかけるが、そこから入ってきた人は1期目にはいなかった。つまり、1期目はTwitterによる口コミだけで集まる人たちもいたということだ。女子高生がつぶやいたというTwitterのアカウントや文章などは不明である。2期目以降は、メディアによるJK課の報道や市の広報、JK課メンバー自らが自分の学校の各クラスを周り、新1年生に直接声掛けを行ったり、駅前でティッシュ配りを行ったり、ポスターを貼るなどして募集しているようだ。

実際にJK課のメンバー7人に、JK課に入った経緯を聞くと、「先輩に誘われたから」という理由の人が3名、「友達に誘われたから」という人が1名、「親に勧められたから」「もともと子供会に入っていて、その関係者に加入を勧められたから」「OC課のおばちゃんに勧められたから」といったように、親やOC課・子供会などといった市民団体に所属する知人から勧められたという人が3名いた。いずれもTwitterや市役所のHPなどではなく、周りの人からの声掛けでJK課に加入していることがわかる。JK課の先輩からの勧誘だけでなく、JK課をよく知る周りの大人からも勧められていて、口コミだけで集まったというのは本当のようだ。

こういった口コミで最初は13人だったメンバーが現在は40人以上も集まっており、「楽

しそうだったから」という理由で入る人がほとんどであることから、「楽しいまちづくり」なら、若者が自主的に参加したいと感じるのかもしれない。逆を言えば、楽しくないとまちづくりをしたいとも若者は思わないのではないだろうか。若新さんは「楽しいまちづくりは楽しくないと続けられない」「大人にとってだけでなく若者にとっても楽しいまちである必要がある」と語っていることから分かるように、まちづくりには「楽しい」という要素が必要である。つまり、地方再生には若者・特に女性が残ってくれることが大事なのであれば、若者を引き込めるようなみんなが楽しいと思えるまちづくりをすることで、若者にまず、まちづくりへの関心を持ってもらうことが大切なのである。

第3項 活動・役割分担

まず活動日については、何曜日、週に何回などは決まっていない。イベントが近づくと活動日が増えたり、企画の話し合いについて、事前にJK課のグループLINEで連絡があり、メンバーの都合が良い日に集まったりするようだ。次に、ミーティングの司会進行については、基本はミーティングのチーフ担当のものが行っている。チーフがいないときは誰かが代わりに行う。企画の運営については、ミーティングでやりたい人を集め、やりたい人の中からチーフを決め、チーフが中心となって企画を進めていく。一つの企画に少ないときは3人で取り組むこともある。そんな企画の決め方であるが、中本さんは次のように話す。

中本さん：なんか、やりたいことやっていいって言われたんで、とりあえず自分で。みんな自分。とりあえずやりたいことを上げて行こうっていう感じで、本当になんでも上げてくれますよやりたいこと。お菓子食べたいとかでも全然ありで、何言ってもいいんで。誰も否定しないんで。とりあえず言って、それに加えて、ほかの人の意見も加えてって、それが大きいイベントになるって感じがJK課の提案してく時の流れ。

JK課では他の企業からの依頼を受けて活動することもあるが、基本的には自分のやりたいことを挙げて、それをみんなで話し合い形にしていく。「やりたいことをやっていい」と言われて「やりたいことをやってる」「誰も否定しないから」と、なんでもやらせてくれるという考え方が出来ている。このような考え方は若新さんの「市役所側に提案すればやってくれる」という感覚を持つことが大切だという考え方に繋がってくると考える。そして、このようなミーティングや企画への参加は自由であるため、積極的に参加する人もいれば、全然参加しない人もいるという。中には参加すると言っているも当日になると不参加になる人もいるほどJK課の活動はゆるい。そのため、部活とJK課の活動を両立してやっている子も多く、やめる子はほとんどいない。参加が自由であるという「ゆるさ」がJK課を続けやすいポイントになっているように感じる。

第4項 イベント概要

JK 課 2 期生（注.本稿では 2 期目に加入したメンバーを「2 期生」と呼ぶ。他も同様である。）であるミサへのインタビューをもとに、これまで行われてきたイベントの中で、自分たちから提案したイベント「図書館アプリ Sabota の開発」「スイーツプロジェクト」「全国高校生まちづくりサミット」「JC3 体験会」「ピカピカプラン」「JK 課とガチで語ろう」についてまとめた。以下はそれぞれのイベントについての概要とその語りである。

○図書館アプリ Sabota の開発

図書館アプリ Sabota は福井県鯖江市図書館の空席状況確認用のアプリであり、「さばえ (Sa) 本 (bo) データ (ta)」から名付けられた。これは鯖江市にある「jig.jp」という会社と協力して作られたものであるが、アプリを作りたいからこの会社をお願いしたというわけではない。ここの社長さんとお話する機会があり、その場でなにか悩みはないかとみんなで悩みを出し合った結果、図書館の空席状況が知りたいということになり、では、アプリを作るのはどうだろうかという結論に至ったのである。このアプリを提案したのは 1 期生の通称みどりんという人物であり、作るようになった理由についての中本さんは以下のよう

中本さん：テスト前になると、高校生で溢れて、席埋まってることあるんですよ。で、なんか勉強したいのに、行ったのにできないじゃんみたいな。自転車漕いで行ったのにみたいな。空いてなくて、結局帰らなきゃいけないみたいな。

徳田：結構かかる？

中本さん：かかります。距離が遠くて。で、なんかもっと早くしれないのかな。知りたいってなって。

理由としては、テスト期間などは鯖江市図書館を利用する高校生が多く、図書館に時間をかけて行っても満席で勉強することもできず帰ることがあるため、席の空き状況に行く前に知れたらいいのという悩みから始まったことが分かる。子どもだけではどうすることもできない悩みであるが、jig.jp さんと協力することによって解決できた。しかし、この悩みは普段勉強で利用する高校生でないと出てこない提案でもある。これは他の高校生ら利用者にも便利なアプリとなったのではないだろうか。中本さんはこのアプリ開発について「自分の悩みがいつの間にかみんなを巻き込んでいた」と話している。

○スイーツプロジェクト

スイーツプロジェクトとは、JK 課オリジナルスイーツを、鯖江市にある和洋菓子店舗であるポーノ菓房とコラボして作り、イベント等で販売するものである。オリジナルスイーツを作ることになったきっかけは、メンバーの一人がすごくお菓子が好きだということで、お菓子を作りたいという提案があり、JK 課オリジナルスイーツを販売することによって、

JK課の認知度も上がるのではないかということから始まった。そのスイーツを店で販売するのではなく、イベントだけで販売する理由を聞いた。ミサは次のように言う。

ミサ：やっぱ、自分の好きなもんばっか集めたんで、コストがかかるんですよ。なんで、800円とかかかるもんなんで、もうそのイベントだけしか出してないです。

ミサ：あ、なんか毎年新しいスイーツが出るたびに、来てくれる人がいるんで、結構すぐに完売します。

以上の語りから、コストがかかるためにイベントだけでしか販売していないようだが、リピーターも多くすぐに完売するほど人気なことがわかる。販売自体は年に3.4回行っているようだ。そんなスイーツプロジェクトの中で、JK課オリジナルの和菓子をみさが提案したことがあるという語りである。

ミサ：何か和菓子って今の若い人食べないじゃないですか。で、大判焼きの中にティラミスと白玉とか、そのなんか洋風の要素をいれた大判焼きを。

今の若い人が和菓子をそもそも食べないことから、和菓子に洋風の要素を取り入れたスイーツの提案は若者ならではの発想だと感じる。このような、お店や企業からの提案をイベントにしていることもあるようだ。

○全国高校生まちづくりサミット

全国高校生まちづくりサミットとは、平成28年8月27日から29日まで、2泊3日で行われた、JK課が企画したイベントである。これまでの2年2期に亘るJK課の取り組みを全国に発信し、行政参加に無関心な市民層の新たな開拓を図ると同時に、全国でまちづくりを行っている高校生との意見交換を通じて、これからの活動の刺激と活力を得る良い機会となることを目的として行われた（FAAVO, 2016のコメント参照）。この3日間を通して、27日の午前中に行われた活動発表のほか、「メガネデザインコンペ」や「まちあるき企画 - わらしべ長者 -」、「夏祭り」、「花火」、「肝試し」など、意見交換や交流会などが行われた。この企画にはSANや市役所の方、市民の方々、スイーツプロジェクトでお世話になった方など多くの人に協力してもらい、みさは「改めてこんなにサポートしてくれる人がいるんや」と感じたという。この企画をやろうと思った理由についての語りは以下のとおりである。

ミサ：最初、いつも金沢とかいろんなところ講演に行ってるだけだったんですよ、自分たちが。なんで、じゃあ自分たちのところでも、これ自分たちと同じような団体をしてる人たちと一緒にトークしたいってなって、あ、じゃあ1日で終わらなそうだから、二泊三日くらいあ

ったんですけど、そんぐらい設けて、ただくれるだけじゃつまらないから、ちょっと遊び要素も入れようみたいな。どんどんどんどん大規模になって、気づいたら結構大きなやつになってました。

以上の語りから、JK 課ではよく県外に講演に行くことがあるようで、そこからの発想のようだ。しかし、それだけじゃつまらない、遊び要素を入れようといった発想は JK 課ならではのものではないだろうか。平成 28 年にこの企画が行われた翌年、このサミットに参加した島田商業高校がこの企画を気に入り、平成 29 年 8 月 26 日から同じく 2 泊 3 日で「全国高校生まちづくりサミット in しまだ」を静岡県でも開催した。

○視察対応

視察対応とは、新聞や各メディア、各大学からの視察などが来た際に、最初に JK 課について説明した後、各質問に答えるというものである。JK 課が出来た当初は担当である高橋さんがパワーポイントを使って最初の説明を行っていたが、今では JK 課の生の声を聞きたいという希望もあり、その説明もメンバー自身が行うこともある。質問内容としては、「なぜ JK 課に入ったのか」「チーフをやったことはあるか」「ブログの更新について」などである。ブログの更新はミサが行っているのだが、ブログを書く際に気を付けていることがある。以下はその語りである。

ミサ：なるべく写真を加工して、なんか色をハッキリさせたりとか、読みやすいように絵文字使ったりとか。なんか、もうすごい誰でも読みやすいようにしたりとか。

徳田：最初ブログって高橋さんが書いとったん？

ミサ：なんか市役所の市民協働課の課長さんが書いていて。すごいですよ。なんか、ミサが書いてる記事と、課長が書いてる記事がほんとに違いすぎて。

徳田：絵文字とか、だって、使っとる？

ミサ：使ってないです。ずっと漢字で。こんなことありました。っていう報告。

ミサがブログを書くようになったのは高橋さんに書いてみてよと言われたことがきっかけであるが、それ以前は市民協働課の課長が書いていたようだ。漢字が多く、日記のようなものではなく、硬い文章で、報告のようなものだったという。実際にブログを見ると分かるように、課長が書いた記事は、ミサが言うように漢字が多く使用され、表現も少し硬いため報告書のような感じである。しかしミサの方は、絵文字や写真を使い、カラフルに仕上げ、口調も読者に語りかけるようになっているため読みやすい。JK 課の活動がより楽しそうに伝えられていた。

○JC3 体験会

JC3 体験会とは、JK 課がどういうことをしているかを知らない中学 3 年生を対象に行わ

れた企画で、普段の打ち合わせに参加したり、一緒にスイーツを考えたりしてもらっていた。始めたきっかけはその年の JK 課の卒業生がいなかったため、その企画の代わりに提案されたという。そこから JK 課に 2 人の子が入ってくれたようだ。

○ピカピカプラン

ピカピカプランとは、JK 課によって企画された「鯖江の町を楽しくキレイにしよう！」という誰でも自由に参加できる遊び感覚のゴミ拾いイベントである。年に 3 回ほど行われており、このように楽しくゴミ拾いをやることになったきっかけについては中本さんは以下のように語る。

中本さん：提案したのは私の友達のおんなじ JK 課 OG の高橋みくっていう、ろんちゃんっていう子なんですけど、ろんちゃんが、歩いて学校来てたんですよ、で、登校してて、ゴミが落ちてて気になるみたいなの。っていう悩みから、えー、ゴミ拾いしたいって感じで、汚いからゴミ拾いしたいって感じで、ただやりたい。綺麗になるからしなきゃいけないとかじゃなくて、自分がゴミ拾いしたいからみたいなの。あくまでもしたいのは自分みたいなの言い方で始まって、あ、じゃあやろうみたいなの。ってなりました。

ミサ：なんか、自分たちが楽しくしてればみんなが楽しいんじゃないかって。それと、普通のことじゃなくて変わったことすれば地域の人も見てくれるんじゃないかってなって。

以上の語りから、自分たちが登校する道のゴミが気になったということからこの企画が提案された。この提案でまちが綺麗になると思ったからではなく、あくまでも自分がしたいからということが強調されている。そして、サミットと同じようにただゴミを拾うのではなく、「楽しく」というのがポイントである。「自分たちが楽しくしてれば楽しいんじゃないか」「変わったこととしてれば地域の人も見てくれる」というように、自分たちにとっても地域の人たちにとっても楽しいこと、さらに、普通のことではなく、JK 課だからこそできる変わったことで注目を集めようとしている。

ゴミ拾いボランティアという名前ではなく、「ピカピカプラン」という名前も楽しそうだ。ピカピカプランは、ゴミ拾いの最後にはゴミを出さないようにと瓶のコーヒー牛乳やフルーツ牛乳を配ったり、ハロウィンには仮装してゴミ拾いをしたり、夏には水鉄砲やスイカ割などを行っているという。そのことから、リピーターがとても多く、回を追うごとに参加人数も増えているようだ。「またやってね」と言ってくれる人もいるため、毎年行っている。

○JK 課とガチで語ろう

JK 課とガチで語ろうとは、JC3 体験会の後に行われたイベントで、議員や市の職員などの「お堅い人」と鯖江の未来について 6 つのグループに分かれて話し合い、話した内容を発

表し合うというものだ。これは、JK 課のメンバーの中に「堅い子」がいて、JC3 体験会がゆるいので「こういうガチなこともやってるんだよってことを見せたい」ということになり、企画された。この企画についてミサは以下のように言う。

ミサ：そーいう議題が結構堅いってみんな言ってて、でも一回だけ、あったらいいねって。でも今年はみんなゆるい感じなんで楽しくやっています。

徳田：その子らはやれて楽しかったのかな？こーいうの。

ミサ：すごい自分にとってもこーいう機会とかあんまないから、やれて、大人とあんま喋れないんだなーって実感したみたいな

徳田：実感できて良かったーって感じ？

ミサ：そうですね。

以上の語りより、「ゆるさ」を重視する JK 課ではこのような堅い企画はほとんどないため、「1 回くらいはあってもいいね」「大人とあんま喋れないんだなーって実感した」と言っているように、貴重な体験ができて良かったと感じているようだ。

以上、いくつか JK 課の企画を紹介してきたが、例えば田村（1999）にあったような公園や施設を作るといった提案は挙げられていない。そういった提案が挙がらない理由に関して、ミサと中本さんの語りを取り上げる。

ミサ：経済的な面を考えると、作るよりももっと周囲の人たちにできることがあるんじゃないかって言って、そっちを考えてます。

中本さん：お金かかることは、お金をかからないように、どうするかみたいな。って感じですね。施設を作ろうとかは全然ないですね。そんな莫大なことは提案しないですね、みんな。ちっちゃいこと。

徳田：悩みを解決するって感じやもんね。

中本さん：そうですね。か、自分が楽しいこと。って感じですかね。

施設や公園を作るといった提案は金銭面の問題もあるが、施設などを作って間接的に地域の人たちに影響を与えるよりも、直接的に関わってできることを探したり、自分の悩み解決につながることや楽しいこと、自分がやりたいことなどを考えたりしてイベントができるようだ。JK 課の「何より自分たちが楽しいということを大事にする」という活動方針がちゃんと企画に反映されていることが分かる。

第 5 項 JK 課メンバー卒業後

鯖江市役所 JK 課プロジェクト概要によると、1 期生卒業生は 11 人中 10 人が、卒業後もまちづくりに関わっているという。それぞれの卒業後の進路についてまとめた（進路につい

ては重複あり)。

- ・市民主役条例推進委員会「若者部会」に加入し、男子高校生たちと一緒に SAN として活動→8人
- ・第6期「市民協同推進会議」へ加入し、副委員長就任→2人
- ・まちづくり系の大学（仁愛大学コミュニケーション学科）進学→1人
- ・一般社団法人「ゆるパブリック」初代理事長就任→1人
- ・学生団体 with 代表就任→1人

以上のことから、11人中10人が卒業後もまちづくりに関わっていることは、JK課プロジェクトの大きな成果といえる。さらに、まちづくり団体の副委員長や、理事長、代表になるなど、まちづくりに関するところに所属するだけでなく、上に立つ人が多いこともJK課でまちづくりを率先して行ってきたからこそではないだろうか。

また、ミサのインタビューでは、JK課に入ったことで、「自分から挨拶するようになった」「人前でしゃべることが苦手ではなくなった」「生徒会の執行部に所属した」「視察対応などで大きく成長できた」など、自分が成長したと覚えることが多かったことからJK課はメンバーの成長につながる活動にもなっていると見える。ミサの例を挙げれば、人前で話すことも苦手だったが、生徒会執行部に所属するようになるまでに成長しており、こういう成長を感じられたことも、卒業後もまちづくりを行う団体に所属したり、団体においても代表というポジションに付くことになった理由としてあげられるのではないだろうか。ちなみに、今回インタビューしたミサも、卒業後はSANへの加入を検討している。

第7節 JK課2期生のミサ

第1項 周りの存在

ミサ（調査概要 参照）がJK課に加入したのは平成27年6月ごろである。男子テニス部のマネージャーとJK課での活動を両立している。JK課では3期目からチーフとしてミーティングでの司会進行を務め、ブログの更新も担当している。そんなミサがJK課に入った理由は以下の語りである。

ミサ：なんかお父さんが市役所のOC課で言うのがあるんですけど、お父さんのその知り合いのOC課に入っているおばちゃんが入りねやーみたいな、て言ってそれが伝わって、入りました。

ミサ：あ、でもなんかテレビでちよくちよくやってたんで、そのものは知ってたんですけど、何をするかとかは全然知らなかった

徳田：そういう説明とかはその一入るってなったときに聞いてから入った感じ？

ミサ：なんか多分されたんですけどちょっとわからなくて、ちょっとなんか流れではいっちゃったみたいな感じです

徳田：じゃーもともと何かまちづくりしたいと思って入ったとかでもなく、

ミサ：あ全然そんな、

徳田：JK課が楽しそうって思って入ってたってわけでもなく、

ミサ：なんか流れ的に。

以上の語りをまとめると、ミサがJK課に入ることになったきっかけはお父さんの知り合いであるOC課のおばちゃんからの勧めである。そして、そのままJK課の説明会に参加し、何をするかよくわからないまま流れで入っている。おばちゃんからは「1回社会科見学のとつもりでやってみたらー」という風に勧められたようだ。このように流れでJK課に入ったミサであるが、これまでJK課を続けてきた理由は何なのか。以下はその語りである。

ミサ：周りの存在が大きくて。こんだけ3年間活動してると、なんかツルちゃんとか、のりピーとか、コラボする人も増えてきて、町で声かけられることとか。なんか町で歩いててもスイーツ販売でお世話になった人とか、あ、みさちゃんやーみたいな。なんで、やっぱそーやって覚えててくれたりするんで、もっと頑張ろうってなる。

以上の語りから、周りの存在がミサの活動を続ける大きな理由となっていることがわかる。JK課での活動を通して自分の周りに知り合いが増えたことや、ミサのことを覚えていてくれたり、声をかけられたりすることが嬉しいのだろう。JK課はミサにとって、鯖江で活躍できる居場所となっているといえる。最近ではJK課の活動がさらに評価されたと感じ

ているようで、「鯖江市の人が頑張ると言われるようになった」と言っていた。

第2項 イベントを通して

イベントを通してまちの人に伝えたいことがあるかを聞いた。毎年行われている「ピカピカプラン」や今年行われた「劇団しあたあ近松コラボ」というJK課役を演じた劇団に対するの想いが強いようだった。以下はその語りである。

ミサ：普通の女子高生が、普通にボランティアをしてるんだよっていうのを知ってほしいなって。こういうボランティアは堅い子、学校でも生徒会長やるみたいな子がするもんやっと思われてることもちょっとあるんで、ただの普通のほんとに平凡なJKがやってるんだよっていうのを知ってほしいです。

ミサ：ピカピカプランで、ゴミ拾うだけじゃなくて、地域の人との繋がりもあるんで、もっとなんか市民の人と仲良くなったりとか、市民の人も、こういう企画以外でも、自分から率先して、ゴミ拾ってくれたらなって思いでやっています。

以上の語りから、ミサはピカピカプランや劇団しあたあ近松コラボによって、「地域の人ともっと仲良くなりたい」「ゴミ拾いを定期的に続けることによって自発的にするようになったらいいな」「地域の人に私たちみたいな普通の女子高生がボランティアをしているということを知ってもらいたい」と思っている。「学校でも生徒会長やるみたいな子がするもん」という意識がJK課の活動を知ることによって少しでも変わってほしいという気持ちが読み取れる。ミサのように初めは「勧められて流れで」「楽しそうだったから」というきっかけでJK課に関わった人たちが、活動していく中で「鯖江のために何かしたい」と思うようになってきているのかもしれないと感じた。

第3項 鯖江に対するイメージの変化

JK課の活動を通して、JK課に入る前と後で鯖江市に対するイメージがどう変わったかを聞いてみた。以下はその語りである。

ミサ：なんか最初は全然鯖江のこと全然知らなくてなんかほんとに何をやってるんかもわからないし、

徳田：あー市役所側がって感じ

ミサ：あーそうです。しかもなんか別にどこも同じかなみたいな福井ならどこも同じ。

徳田：どういうところが？

ミサ：なんかただの街みたいな感じなんかそーゆー住んでるだけみたいだったんですけど、今はやっぱり自分たちが企画したりしていっぱい携わったりしてるんで親近感とか沸くし

市民の人とかにも自分から挨拶したりとかするようになりました

以上の語りから、ただのまち、ただ住んでだけの場所だった鯖江市が、JK 課の活動を通して多くの人と関わっていくことで親近感がわくようになり、市民の人に挨拶するようになったりと自分から関わろうとするようになっていく。次に、JK 課の活動場所である鯖江市役所に対するイメージが変わったかどうか限定して聞いてみた。以下はその語りである。

ミサ：なんか市役所って大人の人が行くみたいなのちょっと堅いイメージだったんですけど、なんかこんな高校生でもいけるんやみたいなの。トイレがどこにあるかもわかるし、今ではもう結構把握してるんで。しかもこんな親身になってくれるんだみたいなのもわかりました。

以上の語りから、市役所は大人の人が行く堅いイメージから、高校生でも行けるし、高校生でも親身になって相談に乗ってくれるような自分たちにより近いものと感じ、最初の堅いイメージは払しょくされている。

第4項 居場所の創出

まちづくりプロジェクトが成功するか否かではなく、JK 課のメンバーにとっての居場所となつてほしいという市役所側が望んできたことについて分析する。橋本・牧田（2016）では、自分のことが好きになること、そして社会の中に自分らしくいることができる場所＝居場所を見出すということができればよいと述べており、インタビューでも居場所になればそれでいいと語っている。居場所についての語りは以下の通りです。

徳田：ミサにとってJK 課ってなんですか？

ミサ：私にとってJK 課は部活みたいな感じで、自分の個性が出せる居場所です。

徳田：JK 課は部活みたいな場所で自分の個性が出せる居場所ってというのは具体的にどういう意味？

ミサ：部活みたいな感じっていうのは、部活とかだったらなんか成長してくじゃないですか。最初、なんも喋らなかつたんですよ。自分宛の質問とか視察対応とかさせてもらえたので、すごい成長できたなーって思ってた。あと、自分の個性が出せる居場所。みんなで40人くらいいるんですよ。全員違って。で、なんか女子ってよくあるじゃないですか、なんかねちっこいの。そういうのも、ほんとにみんなばらばらなので、そういうのが全くなくて。

以上の語りから、ミサはJK 課を成長していく部活のような場所で、全員の個性がバラバラなことや、JK 課ではメンバーが40人以上いるにもかかわらず、その個性を出しても争いなどが起きないことから、自分の個性が出せる居場所だと感じていることが分かる。また、

市民協働課の課長はインタビューの際、「一人一人の子が満足できる場所を作ることが JK 課の役割だ」と述べており、ミサにとって成長でき、個性が出せる居場所となっていることから、JK 課は課長が求めた形になっているといえる。さらに、ミサが成長したと感じていることに関して、第 5 章第 3 節第 5 項でも少し触れたが、「自分から地域の人にあいさつできるようになったこと」「人前で話すのが苦手ではなくなったこと」「生徒会執行部への所属」などがある。ミサがこのように成長した理由は以下の語りである。

ミサ：なんか、テレビ出たりとか取材とか、あと、*flumpool* (ロックバンド) とかそのライブのサポートとか。そっちの方がやばいじゃないですか。それ考えると、あ、自分でもできるんかなって思って、苦手意識がなくなって、じゃあやってみようかなってなりました。

なんか 1 年生の時から、先輩とか見ると、どこにいても市民の人におはようございますって言ってたんで、それ見てたらもう自分もやらなきゃいけないんだってなって、どこいってもおはようございますって言うようになりました。

テレビ出演や取材などの視察対応などは、ミサにとって生徒の前で話すことの方が気が楽であると感じ、生徒会執行部へ所属するようになり、視察対応の数をこなしていくうちに、人前で話すことへの苦手意識もなくなったという。また、挨拶に関しては JK 課の先輩を見習ってということであった。

第 5 項 卒業後の進路

JK 課に入っていた人のほとんどがまちづくりに関する大学のコースに進学したり、SAN や学生団体 With などのまちづくり団体に所属している。このことから、ミサの卒業後の進路について話を聞いてみた。以下はその語りである。

ミサ：えと、福井県になるべく残りたいなって思ってて。

徳田：なんで？

ミサ：なんか福井から離れると、なんかやっぱりずっとそっちのほうに残っちゃうかなって思って。なんかやっぱり結婚したりする時は自分が育ったところで子供とかも育てたいなって思ったんで、福井県。・・・(省略)・・・高校生、高校の初めんときまでは、なんかあー東京行きたいなあってなってたんですけど、今はなんかもう残りたいなあみたいな気持ちの方が。

ミサ：やっぱり、都会とか行って修学旅行とかですけど、なんかあいさつとか普通歩いとる人でもおはよーとか言ったりするんですよ。

徳田：都会で？

ミサ：鯖江とか地元では。なんかそーいうあったかさとか、そーいうところが惹かれます。

以上の語りから、JK 課の活動を通して、鯖江がただのまちではなくなったこともあり、福井に残りたいという気持ちが強くなっている。自分が育ったところで子供を育てたいと感じていることや、挨拶することによって知ったまちや人の温かさにも惹かれていることから、JK 課での活動が鯖江の人との関わりを持たせ、鯖江の温かさを知るといって、鯖江の価値発見につながったといえる。

第8節 JK課OGの中本邦子さん

第1項 成長と人との繋がり

中本邦子さん（調査概要 参照）はJK課の1期生であり、加入したのは高専3年生のときである。そのためJK課には1年間だけ所属していた。部活はソフトテニスをしており、現在はSANに所属するJK課OGの一人である。SANでは副代表を務めており、主にメンバー間での連絡係を担当している。この節では、そんな中本さんがJK課やSANの活動で得たことを紹介していく。

まずは、JK課に入った経緯を聞いた。第5章第3節第2項でも記述したが、横井さんとながりがあった学生団体withに所属する、高専の先輩に誘われて、中本さんはJK課に加入している。以下は加入した理由についての語りである。

中本さん：最初、内申点上がるよみたいな話だったんですよ。なんかまちづくりって課外活動として結構有利にされるっていうか、就職もしやすくなるかもしれないよみたいな感じの誘いで、最初軽いノリで、じゃあ行こっかなーみたいな。

中本さん：で、なんか、自由にしていよみたいな感じの話し方で、本当に好きなことやっていいし、それを僕たちは応援するみたいな。って言われて、最初、は？みたいな。何を言ってるん？みたいな。今まで聞いたことも見たこともないし、何言ってるんやろうとか思いながら、でも、なんかワクワクすることがあって、何でもしていいよって言われて本当に何でもしていいんかなって、今までそんな大人に言われたことないし、それを認めてくれる大人がいることに有り難みを感じ、やってみようかなと。

中本さんは最初、内申点が上がって、就職にも有利になるかもしれないという説明を受け、軽いノリで参加を決めた。その後、横井さんからも説明を受け、初めは活動内容をあまり理解できないようだったが、ワクワク感や、大人からなんでもしていいと初めて言われたこともあり、やってみようと思ったのだと語る。本当に好きなことをやっていいと言われても、目標やテーマが何も決められていない状況がよくわからないのではないかと感じる。また、それを市役所が認めてくれるということは不思議で仕方ないものだろう。

実際に、中本さんの親や友人も「本当に市役所がやってること？」「え、何が楽しいのそれ。」といった反応だったという。最初にJK課をメディアで紹介されたときは、批判が殺到したこともあり、「メディアに出たくない」という子も多かったようだ。そして、批判が殺到したときは、メンバー全員で集まって話し合い「なんか負けたくないね、言ってるだけじゃん、何も知らんくせに言ってるだけじゃんってなって、負けたくないから、みんなで頑張ろう」と言って、やめるのではなく、やるという選択肢を選んだという。そんな中活動を続けた中本さんがJK課での活動を通して変化したことを、鯖江市に対して鯖江市役所に対しての2つに分けて聞いた。以下はその語りである。

中本さん：関わってきた大人の人たちと、今でも結構関わりとかあって、そのお店食べに行くと、その人とずっと喋ってるとか。なんか、知り合いが増えて、外に出ようという気になった。ですね。

中本さん：入る前は、どこにあるのかもわからないし、誰ともわかんないし、市長さんと、今は普通に遊びに行っちゃいますね。

中本さん：最初は、硬い、鯖江市役所に限らず、市役所が硬い場所っていうイメージがありましたね。今はもうぜんっぜんですね。

鯖江市に対しては、学校では寮に入っていたこともあり、活動範囲が学校の敷地内だけだった中本さんであるが、JK 課の活動の中で関わった人が増えたため、学校の敷地外に足を運ぶことが多くなったという。鯖江市役所に対しても、硬いイメージはなくなり、用事がなくても遊びに行くまでに、市役所が中本さんにとってより近い存在になっている。市長さんとも、イベントなどで会う時に普通に話したり、一緒に写真を撮ったりするほど仲良くなっている。そんな良い変化をもたらした JK 課について、中本さんにとってどのような場所であったか聞いた。以下はその語りである。

中本さん：成長させてくれる場。なんか、全部否定的なこと言わずに、全部受け入れてくれるじゃないですか、市役所の人。なんで、やりたいことできて、あと、仲間もいるんで、協力してなんかイベントをやろうみたいな場でもあるしって感じで、成長させてもらいましたね。あと、繋がりを作る場ですかね。

中本さん：遠慮しなくなった。あと、気使わなくなった。気使わずに自分の意見を言えるようになった。なんか大人だからなんかこれは言っちゃだめだなあとか、これは失礼なことなのか一って、昔考えながら喋ってたりしてたんで、なんかなんも、自分の意見言えず、聞くだけみたいな。感じだったんですけど、言ってもいいんだみたいな。っていうのに気づかしてもらって。

JK 課は中本さんにとって、「成長させてくれる場」「繋がりを作る場」となっている。具体的には、活動でのいろいろな人たちとの関わりが、そのイベントだけではなく、その後も続いていたり、ミーティングでの自分の発言がすべて否定されず受け入れられたりするという環境にあったことから、自分の意見を大人だからと遠慮せずに言えるようになったと話している。特に、この「大人だからと遠慮せずに発言できる」ことについては、JK 課のポイントの1つである「大人が教えるのではなくともに創る」という考え方が関係しているのではないだろうか。高橋さんがミーティングの中で、大人の基準で判断せず、全て肯定して、みんなの意見を促すことを徹底していることがちゃんと結果として出ているのである。「大人側の意見が入れば、子どもはどうしても大人が良いと判断する意見を言おうとし

てしまう」という若新さんの考えのもと決められた JK 課のポイントが、中本さんが大人を気にせずに自分の意見を言えるようになったことに繋がったのである。そして、その場所で行ったことの中で、中本さんが一番楽しかったことを聞いた。以下はその語りである。

中本さん：全部、楽しかったです。なんか、JK 課のルールでもないんですけど、来たい時だけきていいみたいな。全然休んでもいいですよ。なんで、やりたくないっていうか、忙しいとか、別に行かなくてもいいかなって時は行ってなかったんで、基本全部楽しかったですね。

やることすべてが楽しかったと中本さんは語っている。その理由としては、JK 課の特徴の 1 つである「ゆるさ」が関係してくると考える。活動には行きたい時だけ行って、休みたい時は休むといったように、強制的なものがないため、結果的に、自分の行きたい時だけ行って、やりたいことだけやれるということになるからである。さらに、それが OC 課の発足に繋がったり、若者のまちづくりへの参加促進に繋がっているのである。

第 2 項 SAN と JK 課の違い

中本さんは JK 課を卒業後して少し後に SAN という団体が出来たことを知り、11 月のイベントに参加し、楽しいからまたやりたいと思い、SAN に加入している。そんな、JK 課と SAN の両方の活動を経験している中本さんに、SAN と JK 課の違いはどこか聞いてみた。以下はその語りである。

中本さん：JK 課はバックサポートがしっかりしてるんですよ。SAN は自分らで。委託してるからなんですけど、今、市の委託事業っていうのが、なんかいくつかあるんですけど、鯖江市は市民に事業を委託してお金をちょっとあげるんで、なんかイベントを企画してくださいみたいな、主催してくださいみたいな。感じのやつをやってて、SAN はその事業を取ってるんで、一切鯖江市は関わったらダメみたいなやつがあるんですよ。

JK 課との大きな違いは、市役所のしっかりしたバックサポートがあるかないかのようだ。ミーティングを決まった日にやらないことや、参加が自由であることには変わりはないようであるが、釜井さんや中本さんのように代表や副代表としての役割がしっかり与えられていたり、イベントのお金の管理や協賛企業を探したりする仕事は、全てメンバーが行わなければならないという。

しかも、現在は委託事業を行っており、市役所にはアドバイスをもらう程度の関わりしか持つてはいけないという決まりがあることが分かる。以上のように、市役所のバックサポートがないことから、SAN で学んだことや考えが変わったことについて聞くと、「お金のやりくりや企業との交渉の仕方を学んだ」といった回答が得られた。お金のやりくりや企業の協

賛集めなど、JK 課の時より大変になったと感じるが、勉強との両立の大変さについてどう思っているのかを聞いた。以下はその語りである。

中本さん:勉強とかやっても、今と変わらない気がするんですよ。なんか、結局ダラダラ、時間あってもダラダラやってみたいな。それぐらいなら時間有効に使ってる今の方が絶対いいなって思います。

中本さんは確かに JK 課のときより自分でやらなきゃいけない事が増えたが、時間を有効に使えていると感じ、今の状況に満足していることが分かる。JK 課を卒業した人たちの受け皿として設立された SAN であるが、こうした若者が活躍できる場所を作るだけで、自然と若者が集まり、充実感を得たり鯖江で活躍できる場となっている。そして最後に、卒業後もまちづくりに関わろうと思っているのか聞いた。以下はその語りである。

中本さん:関わりたいです。関わりたくないとは思ってないです。けど、関わりたいって思いますが、どうやって関わって行くかはわかんないです。自分が楽しいことやってそれがまちづくりに関わってたらいいし、自然に関わりたいですね。なんか、気付いた時にまちづくりに関わってるじゃんっていうのがいいですね。

中本さんの基本的な考え方には、JK 課での活動を通して得た経験がよく反映されており、自分が楽しいことをやって、それがまちづくりに関わってたらいいという考えを持っていることが分かる。それが 1 期目のイベントにも表れており、自分の悩みを解決するためや、自分が楽しいと思うこと、自分がやりたいと思うことが行われている。

第9節 SAN

第1項 SANとは

SANとは、鯖江市民主役条例委員会の若者部会のひとつであり、平成27年4月に発足した。JK課の卒業生や男子高校生、大学生などが、若者の居場所と出番を創出するまちづくりイベントを実施している。若者部会とは、JK課と同時にできた、JK課をサポートする団体である。しかし、JK課卒業生がなにもしなくなるのはつたいないということで、JK課の卒業生もそこに加わり、その後、サポートだけでなく、若者が主体になってやっということになり、若者部会の中に生まれたのがSANというグループである。初めはJK課のOGが4.5人で始まり、現在は約20人（男子高校生4人、高専生（男3人・女8人）、仁愛大学生（男）1人、社会人数名）で活動している。ALL FREEというグループ名で始まったようだが、お酒のイメージが強いので、今のSAN（Sabae Active Network）になったようだ。名前は「太陽のように明るく」をイメージしている。

第2項 イベントの概要

SANでは、イベントをまちづくり基金を利用して自分たちで企画することもあるが、それ以外は、鯖江市役所の市民協働課が市民団体にしてほしい企画を公募した中から選んで行う委託事業を行っている。中学生高校生を対象に、叶えてほしい夢を募集して、その夢を叶える手伝いをする「サバエ×ワカモノ夢創造大学」といった企画や、分裂した商店街が合体するきっかけとなった嵐のコンサートに来るファンをおもてなしするイベント、自分たちで考えた企画では、つつじまつりを盛り上げるために写真ブース（つつじまつりで写真撮り隊）を設けたり、鯖江菓子工房Yamahatsuさんとコラボして作ったベーグルを販売したりする「つつじまつり来訪者おもてなしプロジェクト」やポーノ夢菓房さんとコラボしてお菓子で街を作るといった「お菓子なまちづくり」などの企画が行われている。

○サンドーム来場者おもてなしプロジェクト

SANで一番有名なのが2016年4月23・24日に福井のサンドームで嵐のライブが行われたときに、鯖江駅前で行われたイベントである。7年前に2つに分裂した鯖江駅前の商店街振興グループが、平成28年に再び統合することになったのだが、このイベントもきっかけの一つとなったということで、新聞に取り上げられたのである。（福井新聞,2016/5/24,「鯖江駅前振興へ統合」）この2つの団体は、駅前の13店でつくる「鯖江駅前商店街振興会」と駅前ビルの14店のテナントで作る「サンライズタウン」を指す。鯖江には北陸新幹線の新駅がなく、停車する在来線特急も廃止される見込みがあるということから、鯖江に人が来なくなるという危機感を感じた両グループが、同じ志を持つことを確認し、一致団結しようという考えに至り、このイベントにも両社協力を買って出たという。統合のきっかけとなったSANのイベントが実施されることになった理由は、市役所に「いつもライブに行くのだが駅前が楽しくない」といったメールが届いたため、高橋さ

んが SAN に何かしてほしいということから始まった。実際、商店街は、店は開いているのだが、もともと駅前の人通りが少ないこともあり、静かである。そのため、どこか店には入りづらい雰囲気がある。釜井剣さん（調査概要参照）はそんな商店街を盛り上げようと一致団結することになるまでを次のように語る。

釜井さん：自分たちがこのイベントやることによって、その商店街が統合して、またそこで、新しいイベントが、そのとき4月で、次10月に、次商店街側から自分たちに声がかかって、こういうイベントあります、ジャズのなんかイベント、やるんで、誰かスタッフ来てくれませんかていう・・・(省略)・・・けどこれあったあとに、次新聞に統合しましたみたいな、載ってて。で、それが初めて SAN としての成果。今までなんか楽しむためにというか、若新さんのあれで、結果は後から付いて来るみたいな、そんな感じでやったら結果はついてきたみたいな。感じですね。

以上の語りより、釜井さんは今まで楽しむためにやってきたイベントが、結果として、鯖江での大きな出来事である商店街の統合に関わることができてよかったと感じている。（福井新聞，2016.5.24，「鯖江駅前振興へ統合——6年前分裂の2商店グループ——」参照）

7年前に分裂したという JR 鯖江駅前の商店街が、SAN という若者のグループに刺激を受け、再び商店街を盛り上げようと考えたのではないだろうか。若者が動いているのに、大人が動かないわけにはいかないという気持ちからだろう。若者がまちづくりに積極的になればほかの若者が刺激を受けるだけでなく、OC 課のように影響を受ける大人も出てくる。嵐のイベントでは、つつじまつりと同じような写真コーナーを作り、鯖江ドッグやラーメンなどの移動販売車を3店舗に声をかけ手配し、鯖江のお土産を15個ほど販売も行った。商店街の人たちには商店街の飲食店の案内地図を作成したいということや、トイレや荷物置き場を貸してほしいと約10店舗に声をかけた。さらに、商店街の人たちが自主的に市内の湧水でたてたコーヒーを販売したり、佐川急便が自主的に商店街の人の駐車場を借りてそこにトラックを置き、荷物を管理したりするなどしていたという。佐川急便や商店街の人たち、地区の青年団の協力のおかげでイベントを成功させた釜井さんは「自分たちの思ってるやつより広がって行って、向こうからも来る、そんな感じで。それがもう、これこそかなって。まちづくりかなって」と、自然にみんなが集まって鯖江の駅前を盛り上げようと行動したこれこそが「まちづくり」だと感じている。その他にも以下のイベントを行っている。

○サバエ×ワカモノ夢創造大学

平成29年度の企画であり、今年度1年間、中学生高校生を対象に、叶えてほしい夢をみんな叶えていくために SAN がサポートするという事業である。これは市役所で行った公

募の中から SAN がやると決めたものである。その中から、高校生の提案で、2017年7月15日に H2Olush（ウォーターラッシュ）という企画が実施された。水鉄砲でひたすら水をかけあうというもので、カラーパウダーをかけあうカラーランをまねたものようだ。約40人が参加したという。それともう一つ、鯖江高校からの提案で、学活の授業の時間に行っている鯖江デジタルパンフレットを作成するサポートも行っている。

○つつじまつり来訪者おもてなしプロジェクト

つつじまつりとは、毎年5月に鯖江市の西山公園で行われているイベントであり、期間中は約20万人もの観光客が訪れるという。そこで SAN がつつじまつりをさらに盛り上げようと、写真ブースを設けたり、やまはつさんというパン屋さんとコラボして作ったベーグルを販売したりした。写真を撮る際に使うカメラは平成28年にはカメラ屋さんから一眼レフを借りてその場で現像してプレゼントし、平成29年にはお客さんのスマホを借りて撮影してあげるということをしてきた。ベーグルはプレーン・にんじん・ほうれん草の3種類を作って販売した。このような企画を実施しようとした理由は以下の語りである。

釜井さん：なんかつつじ祭りいっぱい人くるっていうのがあるのと、でもなんか若者がこう楽しめるようなテントは、まあご飯とかはあるけど、まあなんか知れてるよねみたいな。でもうちちょっとなんかできたらなっていうので、若い人が楽しめるようになってことで、その写真撮るっていうのをやりました。

以上の語りから、若者も楽しめるような祭りにしたいという理由からこのイベントを企画していることがわかる。実際に、西山公園で行われるつつじまつりに筆者も行ったことがあるが、年配の方や家族連れなどが訪れることが多く、若者の利用はほとんどない印象だ。出店もあるにはあるが、数も少なく、観光客もまばらにいてにぎわっている雰囲気ではない。つつじはたくさん咲いていてとても綺麗なため静かに鑑賞したい人にはいいかもしれないが、やはりどこか寂しい。そこに若者が出店を出せばそれだけで明るくなるだろうし、若者の利用が増えるかもしれない。実際につつじまつりでは平成28年から2年連続でイベントを行っており、「これを楽しみに来ました」「去年も来ました」といったリピーターがいることから、若者を集めるには若者が楽しめる場を作る必要があり、若者にとって楽しいイベントを考えるためには若者自身のアイデアが大切になってくるのだと感じる。

○お菓子なまちづくり

お菓子なまちは、ポーノ夢菓房さんとコラボして行った企画で、お菓子で街を作ろうというものだ。子供たちにお菓子で家をつくってもらい、SANのメンバーがお菓子で作ったまちの土台の上にのせて、お菓子でまちを表現するといったものだ。自分たちが楽しいと思うこと、やりたいと思ったことを企画にしているという釜井さんは「結果求めずやっているとこ

ろはありますね。楽しめたらいいかなみたいな周りの人も」という風に、自分たちが楽しいと思う企画はみんなにも楽しんでもらえるという若新さんの考え方をもとに実践しているようだ。

第3項 SAN 代表の釜井剣さん

釜井剣さん（調査概要 参照）は SAN の同じ高専生であるメンバーに誘われ、平成 27 年 7 月に行われた SAN のイベントに参加した後、加入している。SAN の代表を務め、ダンス部と SAN の活動を両立している。そんな釜井さんが SAN に入った理由について聞いた。以下はその語りである。

釜井さん：誰でも参加できるやつ、で、それで招待されて行って、若い子たち、あー、動いてるなって思って、あー、楽しそうって思って入りました。

徳田：元々まちづくりしたいと思ってた？

釜井さん：思ってなかったです。いやなんか元々 JK 課の子がもう周りにいっぱいいたんで、それを見て、あーいいなって思ったけど、女の子のやつだしって思って、でもそしたらその若者部会っていうのができて、あーそんなあるんだーと思って聞いてみたら、あーこれ男子でもオッケーって。で、だからそこで初めて自分が男子で初めて入って、

以上の語りより、まちづくりがしたいという気持ちはなかったが、JK 課や SAN の活動している様子を見て刺激を受け、SAN は男子も加入できると知り、加入を決めたようだ。平成 28 年 11 月に行った高橋さんのインタビューでは、「そんなまちづくりをやっている子なんてのは男子ももともとが少ない上に、わざわざ行きたくない... という感じで」と、1 年目には全く集まらず、2 年目も男子の加入者は 1 人だけだったと話していた。しかし、現在は男子が 7 名いることと、釜井さんの JK 課に刺激を受けてという発言から、第 4 章第 5 節第 2 項で挙げた、ミサがイベントを通して伝えたかったことが、現在 SAN のメンバーである男子高校生に伝わったといえるのではないだろうか。

第4項 居場所と出番

SAN の代表である釜井さんが活動を続ける理由・続けていてよかったことを聞いた。以下はその語りです。

釜井さん：楽しいから。あと、結構おつきくなったんで責任感でやめられないってのもあるし、でも結構辞めたいとは思いますが。イベントの進行とか準備中に、早く下に渡したいもう嫌やーとか。で、結構大人のサポートしてくれる人とかもいるんで、その人から圧がかかったりしたときにあーってなって。学校との両立も厳しいなっておもったりするんですけど、なんかかなってるんで、がんばろーって。

徳田:なんか SAN の活動やっててよかったこととかある？

釜井さん: まあ、思い出できるっていうのと、すごいいろんな人が喜んでくれたり、鯖江っていいところとか言ってくれたり、嵐のときとかも、こんなことしてるんだ、すごいいい、親しみやすいまた来ますとか。つつじまつりの時とかも、去年来ましたとかこれを楽しみに来ましたとか、今回も絶対写真撮ってもらおうと思って来ましたとか言ってくれて、お一嬉しいなって。だからそれが続けてる理由にも繋がるかなって。

以上の語りから、JK 課とは違い、SAN には代表という役割があるため、学校との両立が大変だったり、責任感や大人の方からの仕事に対するプレッシャーなどがあったりするようだが、それ以上に、自分が行ったイベントを楽しんでもらえていたり、イベントへのリピーターが増えたりしたことにやりがいを感じており、それを活気に頑張っていることがわかる。そんな SAN の活動目標を聞いた。以下はその語りである。

釜井さん: 一応活動目的としては、若者の居場所と出番を作るっていう。あ、若者っていうのは、自分たちグループの若者の出番と居場所を作るっていう意味もあるし、イベントを作ることでその人たちの出番と居場所を作るみたいなそういう意味もある。若者中心になってにごしてて、別にもう大人でもなんでも、っていう。まあ、結局若者を中心にいろんな世代の人と交流する。で、出番と居場所を作るっていう。

あ: なんか出番はなんとなくわかるんやけど、居場所っていうのが

釜井さん: あー、なんかその、鯖江ってあんまこう楽しい場所、西山公園はありますが、なんかしてないと楽しい(?) 時間ないし特に行くところもないから。楽しいところがないから、そういうので、イベントを作ることによって、若者たちが楽しいと思えるような居場所というか、時間とかを作るイメージ。

以上の語りから、SAN では活動目的として「イベントを通していろんな世代の人と交流することによって、その人の居場所と出番を作る」ことが挙げられているようだ。「特に行くところがない」「楽しいところがない」鯖江を、楽しいイベントを鯖江で開催することによって、そのイベントを実際に行う人もその場所に来る人も、楽しい時間を過ごせる居場所を SAN は作ることができるということだ。

第4章 分析

第1節 JK課の3つの特徴

平成26年からこれまで約4年間活動を続けているJK課は、その活動の中で様々な成果を生み出していることが分かった。まず、最初は多く寄せられていた批判が今では活動が評価され、ほとんど言われることはなくなった。反対していた学校も、今では生徒に加入を勧めるようになり、刺激を受けた鯖江市民がOC課を結成したり、県外にも豊橋市役所JK広報室や湖南市JK課ができるなど、JK課の活動は県内外から高く評価されている。そして、JK課のメンバーの中では、活動の中で鯖江に愛着を持ち、卒業後も鯖江市に残って、まちづくりに関わっていく子が多く存在する。さらに、ミサや中本さんのように、自分の成長が感じられたことで、いろいろなことに挑戦するようになってきている人もいる。卒業した1期生の子たちが今もまちづくりに関わっているのは、2人のようにJK課での成長があったからかもしれない。そんなJK課に影響を受けてSANに加入する男子高校生や高専生もいたり、JK課が周りに影響を与えているのは間違いない。では、なぜこんなにもJK課の活動が周りに影響を与えているのだろうか。先に第2章第3節で取り上げたような、他の高校生の団体とは異なる特徴を考察していく。

それは大きく分けて3つある。1つ目は、「女子高生だけ」ということだろう。全国には多くの市民団体が存在するが、女子高生だけというのは鯖江市が初めてである。2つ目は、市役所が運営面をサポートしていることである。JK課ではリーダーを設けることをせず、イベントごとにチーフを決める程度で組織化していない。3つ目は、まちづくりに「ゆるさ」を取り入れていることである。ミーティングやイベントへの参加は自由であり、自分のやりたいことだけやれることが魅力である。以上3つの特徴を持つJK課で、まちづくりにこれまで関わったことのない女子高生たちが、自分たちが楽しいと思うことを提案、実行している。

この3つのポイントは、若新雄純さんが鯖江市に提案した、3つのポイントに関係がある。それは、「まちづくりに興味のないゆるい市民が中心であること」「誰かが教えるのではなくともに創ること」「教えるのではなく大人側に変化を起こすこと」の3つである。JK課はこれをもとに活動を行っており、このポイントを押さえることによって、JK課は周りに認められ、JK課のメンバー自身も成長していったのではないかと考える。以下ではそれら3つのポイントを意識しつつ分析したい。

第2節 「ゆるい」市民によるまちづくり

まず1つめのポイントである「ゆるい市民によるまちづくり」についてだが、JK課のまちづくりについて若新さんは次のように語っている。

若新さん：寄り道もおしゃれもおしゃれもさ、誰かに求められてするものじゃないじゃん。自分がしたいからする。(中略) 誰か人に言われてやるものじゃないっていうか。JK課は基本そう。(中略) まちづくりっていうのが、何度も言っているように、ないものを埋めるための活動じゃないから。(中略) ないと困るわけじゃないけど、あったらもっといいものが付加価値っていうんだよね。(中略) JK課っていうものは、なくても困らないけど、あった方がより面白いものだったり。おしゃれもそうじゃん。ないと困るものじゃないんだよ。

寄り道やおしゃれが誰かに求められてするものではなく、することでよりよくなるように、JK課の活動やまちづくりも、本人が自発的にすべきもので、ないと困るものではない。つまり、「ないと困らないけどあった方がいいもの」として、JK課によるまちづくりは考えられている。おしゃれをすることのように、付加価値的な意味を持つまちづくりが、地域の人々のまちづくりに対する考え方や今までのまちづくりのやり方を変えるのに必要だということだ。

そして、そういった寄り道のように楽しいまちづくりができるのは女子高生だというのが若新さんの考えである。結果を出そうと考えるのではなく、楽しんで活動する過程で、何か変化があったらいいなという「ゆるさ」が女子高生にはあるという。服で例えると、おしゃれよりも実用性を求める男子より、おしゃれをして気分を変えたりする女子の方が合っているということだと考えられる。イベントの例を挙げると、ゲーム感覚で行うピカピカプランや、可愛いオリジナルスイーツの提案なども、直接的にまちづくりに関係してはいないかもしれないが、楽しくゴミ拾いをしたり、かわいい限定のケーキを販売したりすることで、イベントへの参加者が年々増えている。また、そういった活動が楽しそうだと感じて入ったメンバーが多いことから、結果的にまちづくりへ関心を持つ人が増え、まちを盛り上げることに繋がっているといえる。これは十分な成果といえるのではないだろうか。

さらに、女子高生が持つ「ゆるさ」をJK課にも反映させるように、ミーティングやイベントなどへの参加は自由参加となっており、JK課のグループ内での代表などは決めないという活動の「ゆるさ」もある。リーダーを設けず組織化しないために、自分のやりたいことだけしたり、行きたい時だけ参加するといった仕組みが成り立つのである。やりたいこと、楽しいことだけできるというこの環境が、結果的にメンバー1人1人の参加意欲の向上につながり、JK課のメンバーの増加や継続に繋がっていると考えられる。

第3節 教えるのではなくともに創る

次にポイントの2つめである「誰かが教えるのではなくともに創ること」に関しては、単純に大人がこれまでと同じやり方を教えて、まちづくりへの先入観を持たせてしまっは、若者にとっての楽しいまちづくりができなくなってしまうため、大人は口出しせず、サポートに徹するという意味がある。それに加えて、もう一つ若新さんの語りから、このポイントの意図しているところがある。以下はその語りである。

若新さん：まだ世の中の人たちは自分たちから提案しても、それをさせてもらえとは思っていない。(省略) 市民が求めているものを市民から提案してもらえればいいのだが、それを市民が自力で作れるとは限らないから、それを手助けし、実現できる存在が必要である。

(省略) JK課も自分のやりたい活動をやれるかどうか結構大事で。この町は提案すればやらせてくれるんだっていう感覚がこれからの時代大事かなって…。

もう一つの意味は、市民の提案を受け入れる存在を作ろうとすることである。しかし、第3章第4節でも述べたように、鯖江市では市民主役のまちづくりを積極的に行っているが、ミサや中本さん、釜井さんでさえも、JK課やSANに加入する前は、鯖江市が行っているまちづくりについて「何も知らない」状態であった。つまり、まちづくりに積極的に関わる人たち以外、少なくとも高校生は「市役所が市民からの提案を積極的に受け入れている」ということ自体知らないのである。そのため、若新さんの語りにあるように、まずは市民からの提案を受け入れてくれる存在として、市役所が認識されることが大事なのである。そこで、まずはJK課のメンバーに、市役所は提案すればそのサポートをしてくれるという風に思ってもらうことで、提案しやすい環境を作ろうと、大人は口出ししないという状況作りを徹底しているのである。

実際、ミサは自分たちの提案が企画として形になることや親身になって日常生活の相談まで聞いてくれることに、提案すれば企画が認められる、最初はお堅いイメージだった市役所の方がこんなに親身になってくれるんだと感じている。JK課OGである中本さんも、自分がやりたいことがイベントとして形になっていく状況に直接関わっていく中で、「誰も否定しないから、やりたいことをやらせてくれる」と感じていた。SANの釜井さんも、市役所の人と相談をしながら活動をするのが多く、提案を受け入れてくれるし、市役所の方の存在をすごく身近に感じていると語っていた。市長がイベントに来てくれたり、そこでSANの紹介をしてくれたりすることにも、自分たちの存在が認められていると感じていた。

以上のことから、提案しやすい環境が整っていることで、個人個人が自分の意見を発言しやすくなり、メディアなどへの出演で、発言の機会も多くなったことから、ミサの「人前で話すことが苦手ではなくなった」「生徒会執行部に所属した」、中本さんの「気を遣わずに自分の意見を言えるようになった」といった積極性が見に付くことにつながったので

はないかと考える。そんな環境を作る重要な役割を果たす、JK 課担当である高橋さんはこう語る。

高橋さん：聞かれたらこういう風にやろうかっていう風に一緒に考えるっていった方がいいかもしれませんけどね。やからまあ、私らの役目は。ただまあ、上からもう上から目線でね、「君たち高校生まだ街づくりとかイベントとかやったことないだろ。こんなイベントはこうやってやるんだよ」みたいな言い方は一切しないと。自分たちでまず考えようと、こっちも一緒になって考えるよっていうスタンス。

高橋さん：ああそう、ああそう、って感じで。全肯定型でやってるかもしれませんね。

今まで大人がやってきたまちづくりを参考にして意見を言うのではなく、自分もメンバーの一員としての立場から、意見を否定するのではなく、全て肯定して促すという方法を取っていることが分かる。この、全て肯定してくれるという高橋さんの存在があったからこそ、中本さんのように「誰も否定しないから」「やりたいっていったらやらせてくれる」という感覚が定着したのだろう。また、ミサや中本さんの成長として「自分の意見を言えるようになったこと」「大人に遠慮しなくなったこと」なども、こういった環境があったからこそ成長できたのではないかと考える。

第4節 大人側に変化を起こす

3つ目のポイントで「大人側に変化を起こす」とあるが、これは若者にまちづくりに関わってほしいという思いがあるにもかかわらず、若者にはできない、やらせるのは無理だと思っている大人が多いからではないだろうか。実際、JK課が始まったばかりの頃には「高校生なんかに何ができるのか」「派手な人と一緒にしてほしくない」「チャラチャラしてるだけ」「JK ビジネスだ」などといった批判もあった。そんな大人の考え方を換えようとJK課が提案されたのではないだろうか。

高橋さんへのインタビューから、大人が若者に持っていた考え方が、「チャラチャラしている」といったものから、「大人が考え付かないことをやってくれている」「鯖江に貢献している」といったものへと変化し、そういった批判も無くなり、今では学校側が積極的に参加を促すまでに高校生の活動が評価されていることが分かった。このことから、JK課の活動は、JK課のメンバーだけでなく、メンバー以外の若者に対しての見方も変わるきっかけとなったのではないだろうか。また、OC課や合体した商店街のように、「若者が頑張っているなら」と大人も刺激を受けて行動に移すことも、JK課が積極的に活動したからこそであり、これからの若者の活躍がますます期待されるだろう。

さらに言えば、そういった「JK ビジネス」などの知識を持つ大人がいる中で、あえて「女子高校生」だけでまちづくりをするというインパクトが強いプロジェクトを行ったことが、結果的に大人側への意識変化に大きく影響を与えているとも考えられる。批判を受けた際「なんか負けたくないね、言ってるだけじゃん、何も知らんくせに言ってるだけじゃん」と言って活動を続けること決めた中本さんを含むJK課1期生のメンバーの決断が大人側の意識を変えることに繋がったのである。

第5節 鯖江の成長

これまで述べてきたように、JK 課では3つのポイントを大切に活動してきた。その中で、「鯖江市役所 JK 課プロジェクト概要」（2017/10/31 現在）によれば、目に見える成果として以下のことが挙げられている。

- ・ 県教育庁（教育委員会）と学校の理解（参加高校が2校から7校へ変化）
- ・ 現代社会副読本 2016 の表紙抜擢
- ・ 家庭科資料集 2017 に掲載
- ・ 全国の自治体若手職員 40 人が JK 課にインターンシップ
- ・ 全国のまちづくり活動を行っている 51 人の高校生（8 団体）が集結しサミット開催
- ・ るるぶ福井 2016 の福井最旬ニュースに記事掲載
- ・ 2015 年度ふるさとづくり大賞「総務大臣賞」受賞
- ・ 全国から相次ぐ視察（月平均 4 団体…議会・自治体職員・民間企業・団体など）
- ・ クラウドファンディング実施（1 回目 754,000 円、2 回目 581,000）
- ・ OC 課誕生（2014,6,1）
- ・ SAN 結成（2015,4,1）
- ・ 豊橋市役所 JK 広報室誕生（2016,6,9）
- ・ 湖南市役所 JK 課（2016,8,29）
- ・ メンバーの増加（13 人→16 人→27 人→45 人）

この中でも、OC 課や豊橋市役所 JK 広報室、湖南市役所 JK 課のように、鯖江市役所 JK 課の活動を見て、自分たちもまちづくりをしようと自発的に立ち上がった団体があることは、鯖江市役所 JK 課プロジェクトにとって大きな成果であるだろう。

また、JK 課のメンバーであるミサも、最初はなんとなく知人に勧められてなんとなく流れで入ったと言っていたが、今では、第5章第4節第2項でも述べたように、JK 課の活動を通して自分たちのことを知ってもらいたいという想いで活動を行っている。自分たちみたいな普通の女子高生でもやっていること、生徒会のような真面目な人だけがやっているわけではないことを知ってもらい、もっとまちづくりに関わる人が増えてほしいと考えているようだ。初めは「勧められて、流れで」「楽しそうだったから」というきっかけで JK 課に関わった人たちが、活動をしていく中で「鯖江のために何かしたい」と思うようになったことも成果の一つといえるのではないだろうか。1 期生のほとんどが現在もまちづくりに関わっていることや、ミサが鯖江に残りたいと思ったことも JK 課プロジェクトがあったからこそである。

JK 課プロジェクトがなければ大人の若者に対する見方も変わっていないし、メンバーが卒業後の進路を鯖江市内にすることも、釜井さんが SAN に入ることもなかっただろう。ましてや、高校生が鯖江のまちづくりに関わることなんてなかったかもしれない。メ

ンバーのいろんな成長のきっかけや、居場所として、JK 課はこれからも活躍していくの
だろう。

第5章 考察

この章では、JK 課の特徴と成功した理由を考えてみた。特徴として、まず、第2章の先行研究で紹介した、松野（1999）の3つの分類に関して言えば、鯖江市役所 JK 課プロジェクトは市民主体の活動であり、かつ、市役所が積極的にそれをサポートしていることから、「双方向型」であるといえる。具体的な理由としては、JK 課は市民提案から始まったこと、行政が完全なサポート役として存在していること、予算がすべてクラウドファンディングで補われていることの3つが挙げられる。

1つ目の理由に関していえば、JK 課は NPO 法人エル・コミュニティ主催のおとな版地域活性化プランコンテストで、福井出身である若新雄純によって提案されたものである。このコンテストの最終目標は、提案されたプランを実際に鯖江市役所で協議し、その結果、実現できるものは市役所の支援を得ながら市民主体で実行していこうというものだ。

2つ目の理由に関連するのは、JK 課には「まちづくりに興味のないゆるい市民が中心であること」「誰かが教えるのではなくともに創ること」「教えるのではなく大人側に変化を起こすこと」といった3つのポイントがあるのだが、このうち、「誰かが教えるのではなくともに創ること」に注目したい。これは、第4章第3節でも登場している JK 課担当の高橋さんのように、市役所の人たちが完全に活動のサポートに徹するということである。JK 課のメンバーにはまちづくりに関しての大人側の考え方や知識などを一切与えず、ミーティングでは完全にアドバイス役に徹し、イベントの実行時においても、聞かれたら答えるだけで、完全にサポート・補助に回るというものである。

さらに3つ目、市役所側はミーティングの場などを提供するだけで、財政的な支援は一切していない。つまり、クラウドファンディングによって JK 課の活動費を全て補っているということだ。

以上のことから、まちづくりの提案からすでに市民主体で始まっており、市役所側は JK 課のメンバーによるまちづくりをサポートする立場として、ともに活動を続けていることがわかる。よって、鯖江市役所 JK 課プロジェクトは最初に述べたように「双方向型」と言える。また、協働のまちづくりを行うために、行政が持つべき「あくまでも行政側は補助的で市民活動を支援する立場である」という意識も、サポートに徹するという JK 課の活動を通して養われていく可能性があると考えられる。さらに、JK 課の3つのポイントのうち1つである「教えるのではなく大人側に変化を起こすこと」について、高橋さんは「チャラチャラして鯖江の PR をするだけ」というものから「大人が考え付かないようなことまでしている」という風に大人の考え方が変わったと語っている。もともと鯖江市は市民主体のまちづくりを行っていたが、まちづくりの知識がほとんどない高校生が関わることはほとんどなかった。釜井さんが JK 課の存在を知って自分もやりたいと思ったように、JK 課を機に、若者がまちづくりに積極的に参加するようになっていく。また、そういった若者の刺激を受けて、様々なまちづくりの方法を学び、今までのやり方を市民に教えるのではなく、市民の活動を積極的にサポートしようという行政側の意識も養われるかもしれない。

次に、第3節で取り上げた高校生によるまちづくりの事例との比較により、JK課の特徴をまとめる。第3節では辰野高校とその関係者が行う「辰野フォーラム」と栃木市で行われた、高校生に“居場所”というテーマを与えて行った「若者の居場所作り検討会」、当時高校2年生であった久保田さんによって作られた「NPO 法人あおもり若者プロジェクト クリエイト」による企画「高校生カフェABC」の3つの事例を取り上げた。まず、「辰野フォーラム」という事例は、特定の高校とその関係者によるまちづくり活動である。JK課のメンバーは鯖江市在住、もしくは鯖江市内の高校に通う女子高生から構成されており、大人側がサポートに徹していることから、特定の高校だけではないことと、活動の主体が高校生だけではないということが大きな違いとしてあげられる。

次に、栃木市の「若者の居場所作り検討会」という事例と比較する。これは、栃木市の「若者の居場所づくり事業」の一つとして行われた居場所をテーマにした検討会に高校生が参加し、大人からのアドバイスをもとに、居場所の整備方針についての提案をまとめ、市に提出するといったもので、この検討会に参加した高校生がまちづくりに参画する意識を高めることや地域に愛着を持つことなどを目的として行われた。この事例では、居場所というトピックを設定して議論が行われ、提案をまとめるだけではなく、検討会への参加によって、高校生のまちづくりへの参画に対する意識の向上も図られている。また、大人から積極的にアドバイスを行うことで、高校生のまちへの関心を高めている。これに対し、JK課においての活動は、学校の帰り道にする寄り道のような「付加価値的なまちづくり」を目指しているため、活動に明確な目的はなく、メンバー自身が楽しむということを一番大切にしている。また、大人側がサポートに徹することで、高校生が主体となった活動が実現できており、この事例のように、市に提案して市が主体となって実現に向けて行動するのではなく、メンバーが提案したものはメンバーが実行まで行うという、アイデアの直接的な実現という点においても違いがある。さらにこの事業では、大人側の働きかけが、高校生のまちづくりへの参画促進に繋がるかといった点が重視されているが、JK課では大人側の働きかけなしに、いかに高校生たちのアイデアが実践されていくのか、その実践プロセスが重視されているという点も異なってくる。

最後に、3つ目の高校生カフェABCであるが、これはNPO 法人あおもり若者プロジェクト クリエイトというまちづくり団体が行った活動の一つである。リエイトは、2009年に、当時高校2年生だった理事長久保田が立ち上げたものであり、現在も高校生・大学生を中心に活動を続けており、活動を通じて「みんなが幸せになる」ことを目標としている。以上のことから、JK課では、組織化されていない点と目標設定がされていない点という2つの大きな違いがみられる。JK課では代表者を設けず、財政的な面では市役所がサポート役として動き、活動の頻度やテーマは決まっておらず、活動のプロセスを重視するという「ゆるさ」を意識している。そのため、正規の行政団体でもないし、民間法人というわけでもない。

以上をまとめると、「辰野フォーラム」と「若者の居場所作り検討会」においては、高校

生主体ではなく、大人側のアドバイスのもと活動が行われているため、若者独自の発想が限定的な範囲内で展開されている。他方、高校生だけではないが、若者が主体となって活動を行っており、大人はサポートに回るといった、JK課に一番近い団体であるクリエイトだが、活動目的が明確であり、組織化されているといった点が、やはりJK課とは異なる。この2つの違いは3つの事例全てに言える事であるが、JK課では、何よりもメンバーが活動を楽しむことを大切にしており、それがまちづくりに関わっていらいたいというような、目的がない「寄り道のような、付加価値的なまちづくり」を目指しているのである。自分がやりたい企画だけ参加したり、行きたい日だけ活動に参加したりすることが、JK課での活動を楽しむ気持ちややる気の向上につながっていると考える。こうした「ゆるさ」は、運営面のサポートを市役所が行い、JK課を組織化しないことによって可能にしている。そして、このような「ゆるさ」があったからこそ、メンバーはのびのびと自由な発想でまちづくりを楽しむことができているのである。それがまちづくりへの関心を高めるだけでなく、ミサの「人前で話すことが苦手ではなくなった」ことや、中本さんの「大人に遠慮せず自分の意見が言えるようになった」ことのような、メンバーの成長にもつながったことから、この「ゆるさ」がJK課の1番の個性であり、魅力であると感じている。

では、この章のまとめとして、JK課がなぜ成功しているのか、先に記述した特徴を参考にしながら考察していく。まず、女子だけ、しかも高校生がまちづくりをするということで注目を集めたのは間違いないだろう。しかも、「JKビジネス」といったイメージを強く持つ人が多い中で女子高生だけで構成されたJK課の発足と、それをさらに、市役所が全面的にサポートするという、周りは注目せざるをえない状況だったはずだ。批判の1部にもあった「高校生に何ができるのか」と感じた人のように、女子にも高校生にも何もできるはずがないと考えた人もいたはずだ。筆者も最初は、鯖江のPRのために珍しいことをしているだけで、高校生ができる程度のことしかできないのではないかと思っていた。しかし、JK課の特徴である「組織化されていないこと」やそこから生まれる「ゆるさ」によって、様々な成果を生み出してきた。OC課やSANの発足、JK課メンバーの増加や卒業後もまちづくりに関わるメンバーがいること、メンバーの個人的な成長などである。リーダーを設けず、運営面をすべて市役所が補うことで、ミーティングやイベントへの参加が自由であるという「ゆるさ」が生まれ、それが学校との両立を可能にし、「楽しそうだから」という理由で気軽に加入することができていたり、自分のやりたいことができる「楽しさ」から活動を続けていたりするメンバーも多い。そのため、JK課のメンバーは年々増加傾向にあり、卒業後もまちづくりに関わることも珍しくない。鯖江市では、先生から参加を勧められるまでに、高校生がまちづくりへ参加するということがあたりまえになってきている。また、「自分たちにとって楽しいまちづくり」「結果を意識しないゆるいまちづくり」を意識しているため、それが自然と周りの人にも楽しんでもらうことができ、続けてほしいと望む人も出てきている。若新さんの目指す「付加価値的なまちづくり」が、JK課に加入したい人や活動を続けてほしいと思う人を増やし、結果として、JK課は継続できているのである。

つまり、「女子高生だけ」というまちづくりに関して、初めに良くも悪くも注目された点、市役所のサポートによってメンバーが活動しやすい点、「ゆるさ」や「楽しさ」を重視したことによって、自分もやりたいと思う女子高生を増やすだけでなく、周りから求められるまちづくり活動を行えている点、この3つの特徴がJK課のメンバーの確保と継続につながっていると考える。双方向型のまちづくりの例としては極めて個性的であるが、このような「ゆるさ」や「楽しさ」を重視したやり方も「あり」だということが、この鯖江市役所JK課プロジェクトによって証明されたといえる。市民活動の補助に回るという、双方向型の協働のまちづくりを目指すには、あたりまえであるはずの市役所側の行動が、最初は多く批判された。しかし、こうして4年が経った今、批判もなくなり、JK課の活動は鯖江市に元気を与えるだけでなく、県外に他のJK課ができるまでに周りに良い影響を与え、大きく成長した。「大人が教えない」「楽しい事・やりたいことだけ行う」「市役所が全面的にサポートする」といった、目的を持たずにただ楽しいまちづくりを行う特殊な団体は、若者のまちづくりへの参画や、周りの大人の、若者に対する考え方にも大きな影響を与えたのである。このように様々な影響を周りに与えてきたJK課であるが、1番の役割は、まちづくりの知識を持たない高校生に、まちづくりに関わる機会を与え、自分の居場所を見つけたり、大人になってからも鯖江に愛着を持ったりすることであると感ずる。そして、JK課は市役所のサポートがあったからこそ実現したものであり、そうした市民の居場所を作ることも、市役所の役割なのだと思う。

最後に、これまでいろいろ述べてきたが、JK課での一番の成果は、やはり、最初は自分たちのために楽しいことだけを行っていたメンバーも、周りの人のために、市民のために、鯖江のためにと、JK課での活動を通して、まちづくりの楽しさを伝えようという考え方を持つようになったことである。市役所がJK課という、自分らしさが出せる居場所と活躍できる出番を女子高生に与えたことが、メンバー個人の成長と、自分なりのまちづくりに関する考えを持つこと、さらに、卒業後もまちづくりを続けるということに繋がったのである。そしてこれは、市役所が「提案を受け入れる」という姿勢を持っていなければ実現しなかったことでもある。きっかけがJK課だった人々のように、これからもっと市民が活躍する場を見つけ、自分の住んでいるまちに愛着を持っていけたら良いと思う。地元に関心を持つだけで、自分のまちは自分で良くしようと思えるはずだからだ。そのためには、きっかけを与えるJK課のような場所や存在が必要であり、そんなみんなの居場所や環境を作るために、市役所には受け入れる、サポートするという意識をこれからも強く持ってもらいたいと思う。

参考文献

- ・田中重好 / 辻村大生 / 黒岡晃子, 2001, 「協働型まちづくりの成立条件：東北地方の二つの町を事例として」田中重好・辻村大生・黒岡晃子『現代社会学研究』北海道社会学会, 14: 23-47
- ・田村明, 1999, 『まちづくりの実践』岩波新書
- ・中村 桃子「報告 1 「子どもがつくるまち ミニさくら」の開催——子どもの参画による地域社会の再生をめざして(公開シンポジウム 子ども・若者の参画とまちづくり——千葉からのメッセージ)」『日本社会教育学会紀要』(42), 149-151
- ・橋本和久・牧田泰一, 2014, 「データシティ鯖江&JK 課プロジェクト——市民主役、市民協働のまちづくり」『行政&情報システム』50(6), 39-43
- ・松野弘, 1999, 「現代地域問題の変容と転換期の市民参加：——〈対立的問題〉から〈協働的問題〉への転換の可能性」, 『まちづくり研究年報』まちづくり学会, 2: 20-32,
- ・宮下与兵衛, 2004, 「地域づくりに参加する高校生たち——生徒会と商店街の共同が始まった(特集1 「地域で生きる力を育てる」若者・子どもたちと中小業者のまちづくり)」『中小商工業研究』80, 95-102

参考資料

- ・あおもり若者プロジェクト クリエイトホームページ (<http://www.aocre.com/index.htm>)
- ・高校生カフェ ABC ホームページ (<http://www.aocre.com/cafe2013/index.htm>)
- ・鯖江市役所 JK 課ホームページ (<http://sabae-jk.jp/>)
- ・福井県鯖江市ホームページ (<https://www.city.sabae.fukui.jp/>)
- ・FAAVO ホームページ, 2016 (<https://faavo.jp/sabae/project/1300>)
- ・福井新聞, 2017.10.3, 「女子高生の“親密接客” 営業——東京・大阪に 90%超え集中——」
- ・福井新聞, 2016.5.24, 「鯖江駅前振興へ統合——6年前分裂の2商店グループ——」